

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」(ヨハネ7・37〜38)

この言葉を聞いたひとびとの中に、「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、「この人はメシアだ」と言う者が出ました。他方で、「メシアはガリラヤから出るだろうか。メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。(41〜42)」という人たちがいました。二つのグループの違いは、イエスの発せられた言葉をそのまま受け止めるか、イエスの出自を聖書(旧約聖書)によって確かめるかの違いがあります。

43 こうして、イエスのことで群衆の間に対立が生じた。44 その中にはイエスを捕らえようと思う者もいたが、手をかける者はなかった。

イエスの言葉をそのまま受け止めるか、それともイエスが救い主であることをあきらかにした上で言葉を受け止めるか、ここではその違いが問題となっているのです。

イエスの救いを今の自分にとっての救いとして、受け止めようとする時にはやはりおなじ問題が生じます。その言葉が無条件に受け止めるか、それともイエスが自分にとって救い主であることを(つまり、キリスト教の教義に照らし

て)、確かめた上で、受け止めるかの違いです。冒頭のイエスの言葉を素直に受け止めることができた方にはこれ以後のお話しは必要ないでしょう。

わたしはどちらかというの後者のタイプだと思います。それは説教の準備のときに分かります。時折、聖書の言葉がすんなりと自分の心に落ちるときがあります、そういうときは立て板に水を流したように言葉をつむいでいくことができますが、そうでないときの方が断然多いわけです。ですから、説教の準備の際に、ほとんど毎週のように聖書の説き明かしにすいぶん苦労するわけです。イエスの言葉を無条件に受け止めるために自分を縛っている何ものから解放しなければならぬのです。牧師たちはそれを「聖霊が降る」といいます。「腹に落ちる」といってもよいかもしれません。聖書の説き明かしの言葉に命が宿るのです。

それを、アフガニスタンで医療から農業にいたるまで尊い働きをなさった中村哲さんの書き残したものによって与えられました。その言葉により、…今日から、神学生の松本さんが、アジア学院で実習に入ることもあり…29年前、アジア学院でわたしは非常勤のスタッフとして働いた、若い頃を恥ずかしく思い出しながら、いろんな事を思い巡らしました。

一般的に海外協力とか支援、ひとを助ける仕事にはとかく倫理的な理念、正義感とか責任感が大切であることには違いありません、アジア学院の場合は、「共に生きるため」というモットーを掲げていました。これはわたし自身をはじめ「学院」全体を支えるとても大切な精神的な支柱

であったと思います。

また、「学院」の運営には、当然ながらお金が必要です。「共に生きるために」という立派な目的のために当時は、主に日本のキリスト教会と北アメリカの教会から寄せられる献金によって学院の経営は成り立っていました。しかし当時「学院」には1億8千万円もの負債があり、大きな問題でした。なんとか運営上の改善が迫られていました。

さらに、支援のための教育は、実績として報告できるよい結果がでなければ、献金も集まらなくなり財政的にも支障を来すようになるでしょう。毎年研修生が帰国した後、二月に入ると、農閑期でもあり、スタッフ全員が一週間、毎日評価と反省のための会議を行いました。

教育の理念、献金、実践、実績について、興味深いことを中村さんが「ダラエメールへの道」の中に三無主義という小見出しをつけておっしゃるには…

(ベシャワール) 会の理念を尋ねられることがあるが、冗談の通じるものに対しては、わたしは「無思想・無節操・無駄」と答えて人をケムに巻く。第一の「無思想」とは、特別な考えや立場。思想信条、理論にとらわれないことであり…、例えば難民キャンプで、食うや食わずのことももの明るい笑顔を、「哀れな人を助けなければ」と頑張っている外国人ボランティアの暗い表情と比べてみると、わたしは密かに忍び笑いを催すのである。(会にも主義をもった者はいたがいつしか去って行った)

これを敷衍すると、神に対してもひとに対してでも正しい信仰とか、正当な関わり理念などはかえって出会いを妨げるものとなる。

第二の「無節操」とは、だからでも募金を取ることである。乞食からとったこともある。…一般にパシヤワールの職業的乞食は割合堂々としており、惨めたらしさはない。「」ターイー・デール・コシヤリーキー（神は喜ばれます）」と延べ、「出せ」とばかりに手を差し出す者もある。／わたしも暇であったから「人から施しを受けるには少し態度がでかいのではないか、『すみませんが、いただけないでしょうか』くらいの腰の低さがあつた方が実入りが多いのではないか」と問いただしたところ、ある乞食が案外真面目に説明してくれた。「あなたは神を信じるムサルマン（イスラム教徒）ではありません。ザカート（施し）というのは貧乏人に余り金を投げやるものではありません。貧者に恵みを与えるのは、神に対して徳を積むことです。その心を忘れてはザカートもありませぬ。」この乞食が高僧のような気がした。

「わたしも人に見捨てられるジユザーム（らい）の患者のために、遙か東方から来て斯斯然々の仕事をしている。ならばわたしもムサルマンで、これもザカートといふことになりはしないか。」／（乞食は）「その通り。」／（中村さん）「ならば、あなたも我々の仕事に施しをなさね、神は喜ばれますぞ。」わたしはぐっと手を出すと、乞食は集めた小銭を躊躇なくくれた。わたしはまさかとは思つたが、つま

らぬ議論に神を引き合いに出し、何か大切なものを冒涇したような気がして畏れを覚えた。

ひととひとの間に利害関係や損得勘定を持ち込むと、卑屈になったり、狡猾になったり、傲慢になったりする、自らに（神との関わりにおいて）恥しむところがなければ、たとえ無一物であろうと決して卑屈になる必要はない。

「無駄」について：よい実績を報告しなければならぬが、現場は失費や無駄が多くあり、それを隠して装うように報告をする誘惑にとらわれず、ありのまま、後で後悔するような無駄を報告するのだという。（要約）

ひとから好評を得るために、自らの失敗や無駄を覆い隠す必要はない、いつもありのままであればよい。

中村哲さんが三無主義という言葉をもって、ここに説いていることは、もっともらしい思想信条、正義によつて自らが縛られることなく、施しを受けるために相手にへつらうことなく、成功や、名誉のために媚びへつらうこともない、つまり「自由」を何より大切にすることではないか。

救いを疑うひとたちは、やはりイエスの出自（救い主としてのもっともらしさ）を問いたです、つまり正統の根拠、「救い」の根拠をただします。しかしその必要はないのです。問いたですひとたちは正しい自分、立派な自分という鎧を着ている、その必要はない、それはむしろ、重い鎧で不自由に縛られた哀れむべき自分ではある。

そうではなく、救いそのものを求める「渇いた」存在ではあるが、少なくとも自由な自分が、いるのではないですか？

東日本大震災の直後、屋外で礼拝をもつていた教会の方の話の間接的につかいました。いつも絵空事のように聞こえる聖書の言葉が身に迫ってくる、牧師の説き証しがないことも…

もう一度冒頭の言葉を読み返します。

「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

問題は自分自身が渇いているかどうかだったのです。そしてイエス自らもあの十字架ですべてを成し遂げて「わたしは渇く」（19・28）と、神に生きた水を求められたのです。